



Title	2022年度第3回研究会「博物館のこれからを考える-現場の視点と共に-」開催報告
Author(s)	島, 絵里子
Citation	全日本博物館学会ニュース, 146, 2-5
Issue Date	2024-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91218
Type	journal article
File Information	Gakkai_News_146_2-5.pdf



2022年度 第3回研究会
「博物館のこれからを考えるー現場の視点と共にー」
開催報告

日 時：2023年2月4日（土）13:30～17:00
会 場：日本大学理工学部駿河台キャンパス及びオンライン（Zoom）によるハイフレックス開催
参加費：無料
主 催：全日本博物館学会
参加者数：64名（オンライン47名、対面17名）

1. 開催趣旨

ICOMによる博物館の新定義が2022年8月に決まり、これまでの定義にはなかった“accessible and inclusive”、“diversity and sustainability”、“with the participation of communities”、“reflection”、“knowledge sharing”といった言葉が初めて明記された。また、日本国内においては、博物館法の一部を改正する法律が2022年春に成立し、2023年4月より施行された。

そこで、本研究会においては『博物館のこれからを考えるー現場の視点と共にー』をテーマに、博物館の現場で活躍している学芸員2名の方から実際の取り組みを伺うとともに、参加者の方々とフラットな議論の場をもち、博物館のこれからへの思いを参加者と共に語らうことを開催趣旨とした。

2. 講演者

松山沙樹氏（京都国立近代美術館 研究員）

教育普及担当として、学校連携事業やワークショップの企画運営などをおこなっている。「感覚をひらくー新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」（2017～）、『CONNECT ⇄_（コネクト）』（2020～）など、障害のある方などの多様な人々と美術館をつなぐ活動にも携わる。

外山雅大氏（根室市歴史と自然の資料館 学芸員）

専門はフクロウの生態学。野生生物や自然環境の専門家として、地域の博物館の学芸員として、市民の方々と地域行政、環境省などをつなぐ取り組みをおこなっている。

3. プログラム

13:15-13:30 開場・受付開始（対面・オンラインともに）

13:30-13:35 開会挨拶・研究会の趣旨説明
島 絵里子（北海道大学）

14:35-14:10 講演1 松山 沙樹 氏
『障害のある方と協働した鑑賞プログラムづくりから考える 美術館のこれから』

14:10-14:45 講演2 外山 雅大 氏
『地方小規模館自然史学芸員の苦悩：地域の野生生物保全管理にどこまで、どう関わるか？』

14:45-14:55 休憩

14:55-16:45 ワークショップ
『博物館のこれからを考える』

1) 参加者同士のフリートーク（グループごと）

①自己紹介・今日の研究会に参加しようと思った動機・二人の講演を聞いて、自分自身が感じたこと、考えたこと

②博物館のこれらに向けて、自分自身が取り組みたい／できたらいいなと思うこと（どの視点でも：利用者／学芸員・職員／管理者／ボランティアなど…）

2) 全体共有

3) 松山氏、外山氏からのコメント及び質疑応答

4) ワークショップのまとめ

伊豆原 月絵 氏（日本大学）

16:45-17:00 閉会挨拶 島 絵里子

4. 研究会概要

(1) 松山氏による講演『障害のある方と協働した鑑賞プログラムづくりから考える 美術館のこれから』

主に「感覚をひらくー新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」（以下、「感覚をひらく」）での取り組みを中心に、講演がなされた。

「感覚をひらく」は、地域の盲学校や大学、博物館等と実行委員会を作り、文化庁へ補助金を毎年申請する形で、現在まで継続してきたという。

本事業は、現在では主に二つの活動ー①ほんものの所蔵作品をさわったり、対話しながら鑑賞するワークショップの実施と、②点字・拡大文字による美術館パンフレットや、さわる鑑賞ツールの制作ーにわかれるが、いずれの活動においても、視覚に障害のある人だけに対しての一方的な支援ということではなく、見える・見えない、年齢、それまでの経験などに関わらず、様々な人々がお互いに気づきを与え合って、新しい、誰もが楽しめるような鑑賞の形を一緒に考えていくということを、常

に念頭に置いて活動を進めていることが紹介された。

ワークショップの開催を重ねる中で、美術館は、作品を所蔵し研究し展示の実施を積み重ねているが、視覚によらない鑑賞については、むしろ経験がほとんどない初心者で、どうすればその作品の魅力がわかるのかというのは、目の見えない方や様々な参加者と一緒に活動していくことで、美術館側も新しい気づきを得ていくということを、現場で身にしみて感じたという。そして、美術館が持っているノウハウだけを使ってワークショップや鑑賞ツールを作るのではなく、目の見えない当事者や様々な方々、作家などと協働、協力する活動を始めたこと、その具体的な内容が次に報告された。

まず、点字・拡大文字による美術館パンフレットの作成について。「感覚をひらく」という活動を行っていきにあたり、美術館という場所が、視覚以外の感覚でどのように楽しめる場所なのかを発信することが大事だと考え、製作に着手したという。まず、目の見えない当事者の方と一緒に、半日以上かけて館内外を歩き回り、視覚によらずに美術館を楽しむ方法を歩きながら検討し、次に、そのフィールドワークを踏まえて、美術館のスタッフが1から原稿を書き下ろしたという。その際にこだわったのは、館の既存のパンフレットを単に点訳して終わらせるのではなく、身体感覚や触覚等でどのように美術館を楽しめるかということを中心にテキストを執筆したことだという。さわって楽しむ建築と屋外彫刻、琵琶湖疏水に面したカフェ、美術館周辺にある岡崎公園内の施設の紹介もある。本パンフレットについては、全文が館 Web サイトに公開されている⁽¹⁾。

次に、「さわるコレクション」(2017年度開始)について。美術館が所蔵する様々なジャンルの作品を、凹凸のあるさわる図と、その作品の解説文を点字に印刷したもので紹介するという、図と文章がセットになった鑑賞ツールである。当初は、美術館が1から作品を選び、表現方法や文章を考え、試作品が出来上がった時点で、地域の視覚に障害のある方からフィードバックをもらうプロセスをとっていたが、事業の3年目からは、企画の初期段階から見えない方々と一緒に考えていけるよう、ワーキンググループを作り、最初の話合いから、見えない方に入ってもらって制作を進めていることが報告された。具体例として、井田照一《Weekday》の「さわるコレクション」が紹介された⁽²⁾。制作した鑑賞ツールは、全国の盲学校やライトハウス、点字図書館等に無料配布しているほか、ワークショップでも活用しているという。

最後に、「ABCプロジェクト」(2020年度開始)について。アーティストのA(artist)と、視覚に障害のあ

る方のB(blind)、美術館キュレーターのC(curator)の、三者がそれぞれの感性や専門性を生かして協働するというプロジェクトで、京都国立近代美術館が所蔵する所蔵作品と所蔵作家について、視覚だけによらない鑑賞プログラム作りに取り組んでいるという。具体例として、「眼で聴き、耳で見る—中村裕太が手さぐる河井寛次郎」⁽³⁾が紹介された。河井寛次郎は、京都国立近代美術館の代表的な所蔵作家で、その自宅兼工房が、河井寛次郎記念館として京都に残っている。そこへABCの三者でリサーチに行き、B(視覚に障害のある方)は、寛次郎の暮らしの空間を視覚以外の感覚で味わいそれを伝えることを、A(アーティスト)は、Bの視点を踏まえて、寛次郎の作品や生活の特徴を手でふれて感じることができるような作品の制作を行ったという。そして、実際に美術館内で、来館者がそのリサーチを体験できるような空間をつくり、Aの製作したさわられる造形物を、来館者が畳の上に座って自由にさわって体験できるようにし、さらに、リサーチ時のBの音声を流すことで、耳でも手でも、その感覚を味わうことができる空間にしたという(写真1)。

本講演のまとめとして、松山氏自身が、美術館外の方から新しい視点や学びを得る機会が多くあること、様々な背景を持つ方が集まり、作品を介してコミュニケーションをする中で、美術館という場所をとおして様々な方々が出会い関わる機会が生まれていく可能性を感じていることが述べられた。一方で、全ての専門性を美術館だけに蓄積しようと重荷に感じてしまうのではなく、例えば、本講演で紹介した活動であれば、目の見えない方や盲学校の方、印刷会社の方、外部の専門家の方々に教えてもらいながら、美術館は美術館の専門性を発揮し、他の機関はそれぞれがこれまで蓄積してきたノウハウや知識を活かして一緒に協働することで、より幅の広い、様々な可能性が開けていくのではないかと提案された。



写真1 「眼で聴き、耳で見る—中村裕太が手さぐる河井寛次郎」展示風景(提供:京都国立近代美術館)

(2) 外山氏による講演『地方小規模館自然史学芸員の苦悩：地域の野生生物保全管理にどこまで、どう関わるか？』

はじめに、野生生物の保全管理とは、絶滅の危機に瀕し個体数が減少している生物の生息地の保全、管理を行い、その数や分布の回復を図ること、あるいは、エゾシカやイノシシのように、個体数が増加した生物や、人に持ち込まれたり、イレギュラーに侵入してしまった外来種と、人との軋轢、在来生態系への影響をどうコントロールするかなどの課題を取り扱い、その解決に取り組むことなどの説明があった。

次に、野生生物の保全を行うプロセスについて。まずは、対象生物の生態や生息情報を知ること―絶滅危惧種の場合は、なぜそのような危機的な状況になってしまったのか、外来種や害獣に関しては被害の状況や原因を知ること。次に、それらをもとにして、保全や管理計画を策定していく―手法や技術の検討を行い、関係者や機関との合意形成や実施体制の構築をする。そして、実際の保全管理の実施に入る。このように実施した保全管理について、どのような効果があったのか検証・評価を行い、フィードバックをしていくことが、野生動物の順応管理、保全管理において重要視されている⁽⁴⁾ことが紹介された。

このような中で、博物館は実際にはどんな役割を果たすことができるのか。

日本生態学会誌で連載された「博物館と生態学」の中で、野生生物保護管理や生物多様性保全において、博物館は地域の情報の蓄積や活用体制の構築、幅広い層への普及発信をし、関係する個人や団体、行政担当部署など、多様な立場の人を繋ぐコーディネーターとしての役割を果たす可能性を秘め⁽⁴⁾、地域の生物多様性保全を進めるうえでシンクタンクとして役割を期待されている⁽⁵⁾とあることが紹介された。そして、話題は、外山氏が勤務する「根室市歴史と自然の資料館」のある根室へとつた。

根室市は北海道の東端に位置し、海、川、干潟、湿原、森など多様な自然環境があり（写真2）、絶滅危惧種や

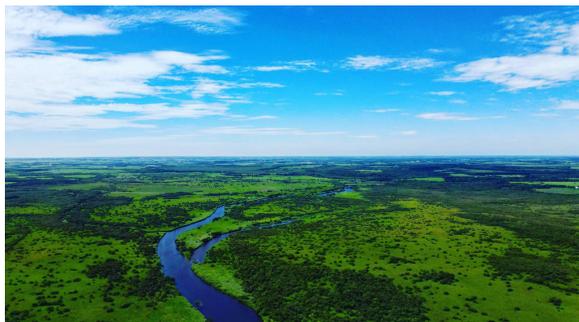


写真2 根室市の多様な自然環境（提供：外山雅大氏）

希少種が多数生息しているという。ラッコやオオワシ、オジロワシ、タンチョウなども身近に観察できるそうだ。そのような地域だからこそ経験した多くのことがあったという。

本講演ではその中から、5つの事例―1. 海鳥クルーズと研究機関のトラブル解決、2. 海岸草原と湿原におけるエゾシカ食圧・踏圧による生態系変化に対し、モニタリング調査から改善策につながった事例、3. 大型風力発電とオジロワシの事故リスクの可視化、4. 太陽光発電に対する湿原の生物多様性保全、5. 冬に、根室のカラスに鳥インフルエンザが発生した際の地域での情報収集と対応（鳥インフルエンザのキャリアになるカモ類を食べるシマフクロウや、越冬地でカラスと接点のあるワシ類への感染拡大を防ぐための対策を行政へ提案）―が紹介された。

本稿では、この中から、「事例2」について紹介したい。根室の春国岱にある砂州には、20年ほど前にはハマナスの大群落が広がり、ハマナスを中心とした生態系が形成され、鳥類も多く生息していたという。しかし、外山氏が根室に着任した2013年には、エゾシカの個体数増加による食圧・踏圧のため、禿山のような状態になっていたという。このため、外山氏に、この問題に取り組んでほしいと依頼があった。そこで、春国岱にあるネイチャーセンターのレンジャーらと話し合い、市民団体と一緒にシカ防除柵をつくることで、植生の回復をはかり、柵の内外で植物、昆虫、鳥類のモニタリング調査を行い、エゾシカの影響の評価をすることにしたという。このモニタリング調査の結果から、根室市においてエゾシカの捕獲、春国岱の管理を所管している市の農林課への提言、環境省によるエゾシカ調査につながり、さらに、この地域のエゾシカ対策を話し合う情報交換会が、環境省主催でつくり、地域の行政と、学芸員、地元で調査をしている人とが共に話し合う関係が構築され、協議が進められたという。

本講演のまとめとして、「博物館は生物の保全管理のシンクタンクになりうるという話を冒頭でしたが、実際に地方の小規模館にいと、現場対応が非常に多く、シンクタンクというよりもトラブルシューターに近く、その都度、一つ一つのことに対応していくような形になっている。ただ、その中でも、博物館が持つ機能を使って役割を果たせたのではないかと考えている」と語られた。

一方で、根室には多様な生物が生息し、絶滅危惧種も多いが、根室管内という行政区には、研究機関や自然史系の大学が非常に少なく、自然史の学芸員も、正職員は外山氏一人のみで、多くの問題に対応しなくてはならないことや、矢面に立って様々な批判を受けることも多いという。しかし、北海道の博物館はネットワークがしっ

かりしており、相談などがしやすい状況なので、だいぶ助けられているとのことだった。

また、市町村の自然史学芸員として感じている課題として、野生生物の保護管理は市町村をまたぐことが多いのに対し、所属は市の学芸員なので、市を越えて専門家会議や調査に出るときには、理解を得るのが難しいこともあるということ。自身は調査等をおして根室にフィードバックして博物館の仕事につなげるように活動をしていること、様々な方々とネットワーク・つながりを持ってサポートしてもらっているおかげで、野生生物の保全管理に関わっていられることが語られた。

最後に、野生生物の問題は、野生生物と人との問題もあるが、突き詰めていくと人と人との問題が多く、そういったときに、学芸員は各地域におり、地域の方々に近い立場にあるので、その課題に応じてシンクタンクであったりコーディネーターであったりという役割を果たしていくことが、これから、より求められてくるのではないかと考えている、として締めくくられた。

(3) ワークショップ『博物館のこれからを考える』

前半は、参加者同士のフリートークで、自己紹介、今日の研究会に参加しようと思った動機、二人の講演を聞いて自分自身が感じたこと・考えたことを共有する時間。後半は、博物館のこれからに向けて、自分自身が取り組みたい／できたらいいなと思うことを、利用者／学芸員・職員／管理者／ボランティアなど、どんな視点でも、自分事として、どんなふうにか考えるかというところを話し合った。

オンラインが5グループ、対面が2グループ、それぞれ6名前後の人数で、博物館の学芸員、利用者、学生、教員、研究者、公園関係の方など、様々な方々が参加しておこなわれた。

全体共有での話題を、いくつか紹介したい。二人の講演を受けて、多角的な視点を得ることが非常に重要と感じたという意見や、地元の協力体制を醸造していきたいというコメントがあったほか、学芸員課程を履修している学生からは、学芸員は教育事業の普及啓発が主な仕事だという印象を持っていたけれど、外山学芸員の講演を聞き、施策提言など行政に提案をしていく役割もあり、博物館の役割というのはもっと広いんだということを知ったという発言もあった。

また、小規模館と大規模館、あるいは地方と都市という状況の違いについては、・ネットワークという力を生かしていくのが良いだろう、・博物館は多種多様であり、博物館同士のネットワークももちろんだが、その地域でのネットワーク、コミュニティを生かしていくことが非常に大きな期待になるという意見もあった。

今後の取り組みとしては、・博物館と市民の方々が対等で、かつ、距離の近いコミュニケーションというところを、対話のプラットフォームというものをつくっていくことが求められるのではないかと提案や、・現在は博物館では身体障害のある方との取り組みのほうが多い印象があるが、知的障害、発達障害のある方との取り組みも求められるだろうという指摘、・広い意味でのアクセシビリティを目指していくことが大事だろうという議論、・地域に根ざした施設でありたい、その地域の中の拠点施設でありたい、地元の方と密接な連携を取るために、地元の方との情報交換の密度を増やしていき、頼られる施設になりたい、といった議論が、各グループのファシリテーターの方々から共有された。

5. 研究会を企画・開催して

松山氏、外山氏の講演、そしてワークショップをおして心に残ったのは、学芸員だけで、あるいは所属する博物館だけで抱え込んで何とかしようとするのではなく、多様な人々、博物館、機関等とつながり、ネットワークを構築し、お互いにやりとりするなかで、新たな鑑賞のしかたや、地域の魅力の再発見や、地域の問題解決等につながっていくということであった。そうすることで、新たな出会いや交流、発見が積み重ねられ、学芸員も、博物館も変化していく。

改正博物館法では、博物館は他の博物館等と連携すること、及び地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り地域の活力の向上に取り組むことが努力義務とされたが、本講演やワークショップでは、その実践を拝聴することができ、今後の取り組みに向けて、講演者や参加者と一緒に考えることができた。

本学会の研究会においても、多様な人々、博物館、機関等がつながり、ネットワークがうまれる機会をつくりだせるよう、継続して取り組んでいきたい。

註

- (1) https://www.momak.go.jp/senses/work_leaflet.html
- (2) https://www.momak.go.jp/senses/work_collection.html
- (3) <https://www.momak.go.jp/senses/abc/kanjiro/>
- (4) 亀田佳代子・中井克樹 2012「野生動物の保護管理における博物館の役割」『日本生態学会誌』62巻2号、pp.307-312.
- (5) 橋本佳延 2011「生物多様性の保全と持続可能な利用のシンクタンクを目指して」『日本生態学会誌』61巻2号、pp.233-236.

(島 絵里子 北海道大学大学院)